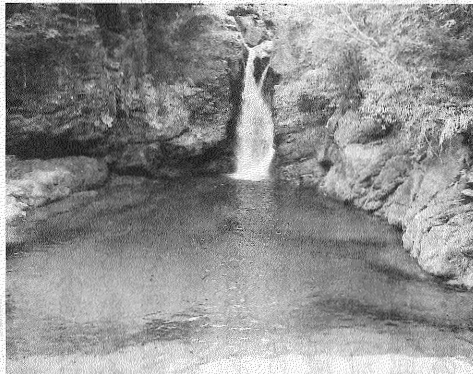


高知で「よく働きよく遊ぶ」



四国の売り方

第2部 都会を離れて②

「仁淀ブルー」の代名詞といわれる「にこ淵」は高知市から車で1時間ほどの距離にある(高知県いの町)

ほどよい田舎で満喫

よく働きよく遊ぶ。高知市の経済団体、高知ニュービジネス協議会が打ち出すワーケーションのキャッチフレーズは明快だ。観光地在住では仕事に身が入らないと考え、ほどよい田舎の高知市で仕事に集中、空いた時間や休日は澄み切った水で知られる仁淀川など県内を満喫してもらおう。お望みなら夜の酒席も。まずショートステイで魅力を知ってもらい、中長期の滞在者獲得を狙う。

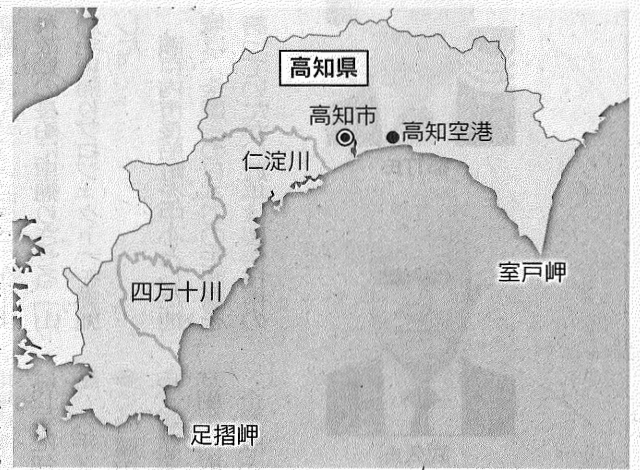
中長期の滞在者獲得狙う



KU合同会社が事業を受託しツアーを作成中。最大50人の参加を見込む。例えば1人7万円ほどの2泊3日のコースは初日に高知空港に到着後、O-SHIKOKUの岡林雅士代表が迎え、手配したレンタカーで市内のホテルへ向かい、チェックイン後はWiFi整備のホテルで働くか、仕事モードを全開にした

日本庭園が美しい「加尾の庭」は坂本龍馬の初恋の人だったとされる女性ゆかりの地。シェアオフィスとして貸し出す(高知市)

高知市をワーケーションの基点に売り込む



人はシェアオフィスに移動する。参加者が息抜きしたい時は、岡林氏が市内の名所・桂浜や高知城、板垣退助が愛した筆山を望む鏡川沿いの散策コースなどを紹介する。なぜ「仁淀ブルー」で有名な仁淀川などではなく、県庁所在地の高知市なのか。岡林氏は言う。「四国の中でも(東西に長く)広大な高知県は交通のインフラが脆弱。高知市は空港から約30分と近いし、海も山もある。『ほどよい田舎』の環境がワーケーションに最適」

イビティに気を取られて携帯端末に集中しきれない様子だった」と同行した岡林氏は振り返る。協議会メンバーで土佐経済同友会の佐竹新市代表幹事は「経済同友会のメンバーであるリコーの山下良則社長から『出張や研修という名目でワーケーションに送り出す企業としては費用対効果を考える』と指摘された」と話す。高知県で休暇だけでなく仕事の成果をきっちり出せる場所は高知市というわけだ。

有料で貸し出す。これは坂本龍馬の初恋の人だったとされる平井加尾ゆかりの邸宅の名前で、今は小川氏の所有。日本庭園には梅や桜など四季折々の花が咲く。邸宅の4部屋ほどをオフィスに提供。戸外の庭園でも仕事ができるように、有線インターネットにつなぐ。

高知県が昨年11月、首都圏の企業などを招いて足摺岬のある土佐清水市のキャンプ場で開いたワーケーションだった。県はサイクリングや地域の食文化を楽しんでもらうイベントを用意し、通信環境も整えて、もてなした。だが「空港から車で3時間強かかり、参加者は疲れ気味。アクテ

高知県がワーケーション誘致が盛んな中、東京や関西のビジネスパーソンから高知市を選んでもらうには、さらに一歩間かける必要があると協議会は分析する。話題性だ。協議会代表理事会長の小川雅弘氏は今後、市郊外にある私邸「加尾の庭」をシェアオフィスとして

高知県もワーケーション誘致に動く。まだ試行錯誤の感があるが、今後は観光の部署と、シェアオフィスを推進する産業関連の部署の間で情報共有が必要になるだろう。組織の縦割りから脱却し、経済団体など民間と協働する仕組みができれば千客万来も夢ではない。

誘致、官民協働がカギ

新型コロナウイルスの感染拡大を契機に、都会から地方へ人の流れをつくる手立てとして注目を集めるワーケーション。だが各地の取り組みの中には、観光振興を目的とした地方創生に主眼を置いているケースが少なくない。高知の経済団体の試みは利用者の目線に立ったものといっている。東京の経済同友会が高

知のワーケーションに何を求めているのか。高知ニュービジネス協議会からは情報収集に熱心だ。同友会からは1カ月ほどの長期ツアーの可能性も打診されているという。その際は平日を高知市で過ごし、週末はレンタカーで仁淀川、四万十川などに行ってもらってメリハリを提案する考え。

(保田井建)